

⑩ 日本国特許庁 (JP)

⑪ 特許出願公開

⑫ 公開特許公報 (A)

昭57—104747

⑬ Int. Cl.³
E 04 B 1/88
B 29 D 27/04
B 29 G 7/02

識別記号
1 0 2

庁内整理番号
6702—2E
2114—4F
6704—4F

⑭ 公開 昭和57年(1982)6月29日

発明の数 1
審査請求 未請求

(全 2 頁)

⑮ 発泡体の施工方法

門真市大字門真1048番地松下電
工株式会社内

⑯ 特 願 昭55—180044

⑰ 出 願 人 松下電工株式会社

⑱ 出 願 昭55(1980)12月18日

門真市大字門真1048番地

⑲ 発 明 者 石田俊生

⑳ 代 理 人 弁理士 竹元敏丸 外 2 名

明 細 書

1. 発明の名称

発泡体の施工方法

2. 特許請求の範囲

施工下地に予じめ網状物を固定しておいてから熱硬化性樹脂発泡体を発泡施工することを特徴とする発泡体の施工方法。

3. 発明の詳細な説明

本発明はフェノール樹脂、ユリア樹脂、メラミン樹脂等の熱硬化性樹脂発泡体の施工方法に関するものでその目的とするところは発泡体を施工場所に強固に接着固定することにある。

従来、フェノール樹脂発泡体やユリア樹脂発泡体をパネル、中空壁体等に注入発泡施工したり又、天井、壁面、床面等に吹付発泡施工する時に発泡体の収縮或は接着力不足に起因する発泡体の剝離、浮き、空隙発生が問題になっていた。

本発明の方法は上記欠点を解決するもので、施工下地に予じめ網状物を固定しておいてから熱硬化性樹脂発泡体を発泡施工することにより、発泡

体が網状物に巻きつき、しかるのち施工下地に接着するため、施工下地と発泡体との接着力が小さくても網状物とは強固に巻きつき接着し又、発泡体の収縮も網状物によって全体的に応力緩和され、部分的収縮が防止されるので発泡体の亀裂発生を防止し且つ発泡体と下地間の剝離、浮き、空隙発生を防止し発泡体と下地間が密着状態で発泡施工されるものである。

次に本発明の方法を詳しく説明する。本発明に用いられる発泡体はフェノール樹脂、ユリア樹脂、メラミン樹脂等のような熱硬化性樹脂発泡体全般である。網状物としては金網、メタルラス、ワイヤラス、寒冷紗、網、目の荒い不織布、目の荒いクロス等で材質的には特に限定するものではないがステンレス鋼、アルミニウム、銅、ポリプロピレン、ナイロン、塩化ビニリデン等のように耐水性、耐腐食性のあるものが好ましい。固定方法として網状物を接着剤で下地に固定したり、網状物の所要位置を接着シート等で下地に固定したり、下地に予じめ紙、釘、ステーブル、ネール、リ

ベット等を埋込み又は接着させておいてからそれらに網状物を巻きつけて固定したり網状物をステーブル等で下地に固定するものである。施工下地としてはコンクリート、石、レンガ、スレート、ガラス等の無機質下地或は合板、ハードボード、パーティクルボード、木、合成樹脂化粧板、ゴム板等の有機質下地或は鉄板、アルミニウム板、ステンレス鋼板、銅板等の金属質下地等に適用できるものである。

次に本発明の方法を実施例にもとずいて説明する。

実施例

厚さ9mmの耐水合板を施工下地とし、網状物として3号平ラスを10cm間隔で14番ステーブルで固定しておいてからユリア樹脂発泡体を厚さ1cmに吹付発泡施工した。

比較例

実施例と同じ耐水合板を施工下地とし、実施例と同じユリア樹脂発泡体を厚さ1cmに吹付発泡加工した。

(3)

実施例と比較例のユリア樹脂発泡体の外観及び施工下地に沿って切断して発泡体と施工下地間の状態を観察した結果は第1表から明らかなように本発明の寸法による発泡体の施工状態は比較例のものより発泡体の形状が安定で且つ施工下地からの浮きがなく本発明の方法の優れていることを確認した。

第 1 表

	実施例	比較例
発泡体の収縮性	なし	1部変形
発泡体の亀裂発生性	なし	亀裂発生
発泡体の施工下地からの浮き	なし	1部浮き発生

特許出願人

松下電工株式会社

代理人弁理士 竹元敏丸

(ほか2名)

(4)